

---

# 恋姫？無双？ 渴っ！！～漢だらけの三国演技～

龍真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫？無双？ 渴っ！！～漢だらけの三国演技～

### 【Nコード】

N5482R

### 【作者名】

龍真

### 【あらすじ】

少し？いやかなりオタクの主人公がある日、目を覚ましたらそこは荒野？

しかも周りにはどこかで見た事あるような鎧をつけた方々がいらっしやるわけで・・・

突然恋姫の世界に飛ばされたオタクで弱小な主人公＋a彼らはその外史で何を掴むのか

恋姫？無双？ 渴っ！！漢だらけの三国演技・・・始まります

## 目覚めと荒野とおっさん達

俺はどこにでもいる普通の高校生・・・弓塚剣馬だゆみづか けんま

まあ、ちよつとアニメが好きで？時々変なテンションになったりするけど？いたって普通だ

・・・まあ、そんな俺だが現在進行形で絶賛混乱中である

何故かと言えば俺は昨日、自分の部屋で三国無双3（ちよつと古いが）をプレイして

呂布伝をクリアし、そのまま疲れ果ててベッドで寝てしまったはずなのだ

だが、目が覚めると目の前に広がるのは荒野＋周りに倒れているおっさん達だった

・・・OK。まったくもって意味がわからないZE  
ともかくここは状況整理だ

1・自分の部屋で三国無双プレイ

←  
2・疲れ果ててベッドで睡眠

←  
3・起きたら荒野＋周りに知らないおっさん達

←  
4・¥（＾o＾）／ オワタ

なんだ！？2と3の間に何があったんだ！？しかも周りには知らないおっさん達・・・

とりあえずこのおっさん達に事情を聞いてみる事にしよう

「すみません！起きてください！！」

どこですかここ！？ヘルプス！！ヘルプスミィシー！！」

「ぐ……ううむ……」

一番近くにいた緑の頭巾をかぶったおっさんを揺すりながら叫ぶ  
どうやらおっさんは気が付いたようで、地面に手を付くとゆっくり  
その場に立ち上がった  
と、同時にその姿を見て俺は固まってしまつと同時に言葉を漏らし  
てしまった

「か……関羽雲長……？」

そう。うつ伏せなのでわからなかったが、このおっさん関羽にそっ  
くりなのである  
しかも服装は三国無双3時代の関羽ときた。すげえ……なんて凄  
いコスプレなんだ

「む……なんだお主は……？何故、拙者の名を……」

そこまで言うとか関羽は何かに気づいたように周りにいるおっさんた  
ちを起こし始めた  
ていうか……声まで関羽に瓜二つかよ……口調も完璧だし、凄  
いなおっさん  
俺が目のおっさんの演技力に感服していると他のおっさんたち  
も立ち上がってきた

だが、その周りのおっさん達の姿も三国無双3の武将に瓜二つだっ  
たのである

しかも皆、有名武将やガチキャラばかり……やっぱカッコいい

方が好きなのか？

それにしても目の前にいるコスプレイヤーの方々は皆レベルが高い蜀からは関羽を始めとした5虎将と諸葛亮とホウ統の2大軍師魏からは夏侯惇と張遼、それに典韋と徐晃

呉からは甘寧、周泰、孫策、周瑜に孫堅

他の勢力は・・・呂布のみだ

コスプレイヤーのおっさんたちは何故か皆で口論したり、話し合ったりしてます

口論は武将の皆様、話し合ってるのは軍師と一部の武将の人たちだね

まあ、とりあえず言えるのは・・・皆様方、そのコスプレ大変似合っております

まさか声まで瓜二つのメンバーとは、武器も細部まで作りこんであるし

目の前のコスプレの完成度に1人で感動していると

不意に諸葛亮のコスプレしたおっさんが俺に声をかけてきた

「・・・少しお話を伺ってもよろしいですか？」

「は・・・はいっ！！何でも聞いてください！！！」

急に離しかけられて少し驚いたが・・・やばい！！この人演技すげえ上手え）汗

「では、私と貴方は初対面です。これは間違いありませんね？」

「はい、まあそうですね・・・」

「それでは先程の緑の頭巾をかぶった男性とも初対面ですね？」

緑の頭巾の男性・・・？ああ、関羽のコスプレしてる人か

「はい」

「ではあの人の名前がなんとか知っていますか？それと私の名前も」

・・・は？何を言ってるんだろうこの人は

今日始めて会ったコスプレイヤーの人の名前なんか俺が知るはず無いだろうに

よっぽど有名なコスプレイヤーの人なのか！？ここまで似てるならその可能性は大だ

「いや、すみませんが自分は関羽さんの名前も諸葛亮さんの名前も知りませんよ？」

とりあえず正直に答えてみた。・・・うん、正直者だな俺

言った瞬間おっさん達の目が険しくなったような気がしたが、気のせいだと思いたい

目の前の諸葛亮のおっさんもおもいきり俺を睨んでくるし・・・俺、なにかした？

「てめえ・・・ふざけてんのかぁ!？」

張飛のコスプレをしたおっさんが俺に向かって怒鳴る

ええっ！？俺なんか悪い事言った！？全く記憶に無いんですけど!!

「お、落ち着いてください！張飛さん!？」

とりあえず地面に手を付き、その場に立とうとする

だが、首筋に突きつけられた刀によってそれはできずに終わった

「動くな・・・動けば・・・斬る」

やべえ、周泰さんマジでかっけえ・・・じゃなくて!!

なんで刀突きつけられてんの!? つつかコレ本物!? 銃刀法は?

「おい、小僧・・・俺はあんまり気が長い方じゃない。早く吐いた方が利口だぞ?」

「ふん・・・この小僧に情報を吐かせるならさっさと終わらせるんだな」

夏侯惇さんに呂布さんも何で俺に武器を向けるの!? てか、何この三国同盟!!

絶賛混乱中の俺だが、唯一つわかる事がある

それはこのままここにいれば、目の前のおっさん達に本気で殺されるという事だ

何かしないと・・・でも何を・・・

俺がここからどう脱出しようか考えていた・・・その時だった

「お、獲物発見・・・いい鎧着てる奴らが多いじゃネエか」

俺も、目の前のおっさん達もいつせいに声がした方向に視線を移すそこには黄色の頭巾を頭にかぶった100人ほどの集団がいた

「何だ貴様ら・・・」



血が空に舞う。視界が赤に染まっていく  
飛び交うは断末魔の叫び声と剣戟の音だけ……

気持ち悪い、ただそれだけが俺の中に残った感情だった

目の前で人が切り裂かれて死んでいく

・・・それら全てが襲い掛かってきた奴らだけだとしても俺には耐えられない

はじめて人の死を直視してしまった俺はその場で意識を何度も失いそうになった

だが、こんな戦場で意識を失えば確実に俺はあの世行きだろう  
「生きたい」ただそれだけを願って意識を保ち続けた

そんな朦朧とする意識の中、俺の視界の端にある光景が映し出された  
襲ってきた男達の荷車、宝や食料が積まれているその荷台の中に人の姿が見えた

ぼろぼろの服を着た銀髪の女の子だ。年は・・・大体12、3ぐらいだろう

膝を抱えて荷車の隅で震えていて、髪のところどころが血で汚れていた

それを見た瞬間、俺はその場から駆け出していた

後ろで諸葛亮のおっさんが何か叫んでいるが何を言っているのかわからない

無我夢中で俺は走った。距離にして30m程の距離がとても長く感じる

俺の頭の中はその女の子の元に辿り着く以外、何も考えていなかった

「おい、しっかりしろ!!」

「・・・・・・・・あ・・・」

俺は荷車に辿り着くと女の子に喋りかける

どうやら無事なようだ。髪の毛で頭に怪我してるのかと思ったが大丈夫だった

女の子はこちらを見上げると、少し安心したような表情をする

俺も安堵の息を吐き、その場に座り込もうとした次の瞬間

「・・・・・・・・ツ！？後ろ！！」

「え・・・」

その声に驚き、すぐさま後ろを振り返ると1人の男が俺に向かって剣を振り上げていた

「あ・・・」

剣はそのまま俺に向かって真っ直ぐに迫ってくる

避けられない。防げない。視界に映る光景に脳が死刑宣告を下す

本来、俺はそこで死んでいたのだろう。そう、第三者の介入が無ければ・・・・・・・・

ー ザシュッ

そんな音がすると共に俺の目の前にいた男が崩れ落ちた

「勇敢な子よ・・・お主の正義しかと見せてもらった

今は休め、その間は俺がお前らを守る槍となろう。錦馬超・・・  
参る！！！！！」

目の前で響いた頼もしい声・・・その声を聞き、俺の意識はそこで途切れた

## 目覚めと荒野とおっさん達（後書き）

やってしまった・・・思いついたからつい・・・

他の小説と同時進行なので更新遅れるかもしれませんが頑張って投稿していきたいと思います

キャラ崩壊もありますが、そこはご了承ください

ご意見がありましたらどしどし感想に書いてください。随時お待ちしております

真

龍

## 盟主とこれからと

「ここは・・・？」

俺が目覚めると目の前には星がいつぱいの夜空が広がっていた  
どうやら俺は地面に寝かされているらしい  
・・・いったい何があったのだろうか

「ようやく気が付いたか」

不意に隣から声がかかる。慌てて振り向くと馬超のコスプレしたお  
っさんがいた

その隣には気絶する前に見た女の子の姿もある

「あの・・・俺はいつたい？」

「何も覚えていないのか？無理もない  
あの後すぐ気絶して今まで起きなかったからな」

「・・・ッ！！そうだ！！あの襲ってきたおっさん達は！？」

そうだ！！俺は武器を持ったおっさん達に襲われていたんだった！！  
慌てて辺りを見回すが、ここには俺と馬超（仮）さんと女の子しか  
いなかった

馬超さんの連れらしき他のおっさんたちの姿もここにはない

「あの賊は俺達で討伐しておいたから心配はいらん」

は？マジですか？いや、ざっと10倍ちよつと人数いましたよ

しかも賊って・・・この人ちょっとコスプレとはいえ、なりきりすぎじゃね？  
ちなみにその他のおっさん達は現在食料調達中でもうそろそろ帰ってくるようだ

ー  
グイッ

横にいた女の子が俺の服の裾を引っ張ってきた

「・・・どうかしたの？」

「あの、お礼・・・ありがとうございます・・・ます」

「え、ああどういたしまして。えゝつと・・・」

「徐庶元直・・・真名は刹里<sup>せつり</sup>・・・です」

「・・・WHAT？」

思わず英語になってしまった。え、何コレ  
俺ってば三国志のコスプレ会場に紛れ込んだ？

いやいやいや、それにしても無双か恋姫かどっちかに揃えようよ  
違和感ありまくりだろうがjk

混乱して頭を抱える俺だが、目の前の少女は心配そうにこちらを見ている

そのあとしばらく考え込んで、ようやく頭の中が整理できてきた

馬超さんと刹里に聞いたのだが2人ともコスプレとかではないらしい  
というか、コスプレという単語自体知らなかった

んで、2人が言うには今の時代は漢王朝もしくはそのすぐ後の時代

何故俺達はここにいるのか？まず、ここがどこなのか

それを聞くと馬超のおっさん達は俺と似たような状況らしい

そして刹里だが、刹里は旅の途中で人攫いに会って俺らと出あった  
ようだ

なのでここがどこかはよくわからないらしい。街道にできればわかる  
そうだが

「おいおい、何の冗談だよ」

俺は自嘲気味に笑う。笑わずにはいられなかった

刹里に話を聞くと現在、この世界で活躍している武将は全員女性だ  
そうだ

信じられないがここは恋姫の世界・・・いわゆるトリップというも  
のらしい

sonでもってコスプレのおっさん達は三国無双の本人達で俺と一緒に  
にこの世界に来た

2人の話を聞いて、脳内で整理した結果がこれか・・・馬鹿げてる  
ZE

・・・いかんいかん。また混乱するところだった

そうこうしているうちに食料調達に言っていた他のおっさん達も帰  
ってきた

そして、全員が集まったところで俺は諸葛亮や周瑜に現在の状況を  
説明する

流石にゲームの事は説明しなかったが、俺が未来の人間でここは別  
世界って事を説明した

・・・まあ、最初は信じてもらえなかった + 斬り殺されそうに

なっただ

最終的に俺のポケットに入っていたMDプレイヤーを見せたら渋々納得してくれた

というわけで現在、俺と軍師メンバーと刹里はこれからの相談をしている

「さて・・・これからの事だがいったいどうする」

「帰る方法もわからないですしね・・・」

一番最初に言葉を発したのは周瑜だ。その隣には諸葛亮とホウ統もいる

「まずは路銀稼ぎでしょう。その後は・・・どうするかねえ」

「路銀を稼ぐにしてもその方法はどうするんですか？

私達にできるのは軍略や戦での活躍ぐらいでしょう」

諸葛亮の言葉にホウ統はそうなんだよねえ・・・と言いながら俯く刹里がそれならどこかの將に仕えてみれば、と提案するがそれは却下となった

元の世界に主がいる身で別の主に仕えるなど言語道断・・・ということだ

俺もこれからどうするか考えていたのだが、ふとある名案が頭によぎった

「じゃあ、義勇軍で傭兵・・・ってのはどうですか？」

俺の言葉に軍師たちと刹里が呆気にとられたような表情をする

「ほ、ほら義勇軍なら仕えるのかも無いし

傭兵ならお金を稼げるし旅もできて情報集めれて一石二鳥じゃないすか」

「………そうですね。いい案かもしれません」

諸葛亮はしばらく考え込むと俺の意見に賛成の意を示した

ホウ統と周喻もそれに頷き、刹里も納得したようで他の武將にそれを伝える事にした

結局、全員が少し不満はあるもののこれからの方針はそれに決定したがここである問題が起きた。それはリーダーを誰にするのか？ということだ

現在は協力しているが、武將の皆さん方は元の世界では敵対していた存在

故に他の勢力を自分より上に置くことが納得できないらしい

だが、義勇軍をやることにおいてリーダーは必要不可欠だ

しかし話し合ってもいっこうに決定する気配が無い

すると馬超が痺れを切らしたのか俺の方に近寄り肩に手を置きながらこう言った

「俺はこの子供を推薦しようと思う」

「はあああああつ！？」

何で俺！？他の武將の方々も呆れてますよ馬超さん！？

「このままでは堂々巡りもいいところだろう  
他の国が自分より上に立つのが問題ならば、何も関係ない子供  
なら問題あるまい」

「馬超殿！！それは・・・」

自慢げに言う馬超に反論したのは趙雲だ  
いや、俺も反論したいんだけどさ。馬超が怖くて反論できません  
刹里はなんかキラキラした目で俺を見てくるし・・・

「なに、ただ盟主とするだけ・・・同盟の象徴のようなものだ  
それにこの子供はこう見えて勇気も持ち合わせている」

「はっはっはっ！！オモシレエじゃネエか！！坊主、名は？」

俺に向かって笑いながら問いかける孫策  
それに俺は少々気おされながらも自分の名前を名乗る

「・・・弓塚剣馬」

「姓が弓、名が塚、字が剣馬か？」

「姓が弓塚で名が剣馬・・・字はありません」

「いい名前じゃネエか！！よし、俺もこいつを推薦するぜ親父」

孫策、あんたもかああああ！！？

なんで！？なんで皆して俺を推薦するの！？

その後、いろいろと口論になったが最終的には俺が盟主・・・とい  
うことになった

盟主とは言っても命令権は無く、実際はほとんど飾りのようなものだ  
そして夜が明けると俺達は森を抜け、近くの町へと歩を進めた

― そして半月後

「何よコレ・・・」

「どうかしたのか？華淋」

「このごろ活躍してるって噂の義勇軍の情報よ

・・・全く持って馬鹿げてるわ。秋蘭読んでみなさい」

「ハッ、・・・その軍に所属する武将の名・・・ッ！？華淋様・・・  
これは」

「なにになに・・・夏侯惇に典韋・・・って何で春蘭と流々の名前  
が！？」

「その他の名もふざけてるとしか思えないわよ？」

「・・・ッ!？」

「どこの誰かは知らないけどふざけた事をしてくれるわね」

気高き霸王はそこに記された名に怒り・・・

「雪蓮!!これは・・・」

「ほう・・・コレは喧嘩を売つとるとしか思えんのう。どうする策殿？」

「もちろん買っつわよ。私達の名前だけでもむかつくってのに・・・  
母様の名前まで使おうってんだから、そんなの許せるわけがないじゃない」

江東の小霸王も怒りをあらわにした

「はあ~~~~っ・・・」

「どうしたの？白蓮ちゃん」

「桃香か・・・ともかくコレをってみろよ」

「んっと・・・なになに」

あ、これって今噂になってる義勇軍の情報？」

「ああ、お前が見たいって言うから調べさせたんだけど・・・驚くなよ？」

「？・・・へ、え、あれ？ぱ、白蓮ちゃん何これ？」

人徳の王はその内容に混乱し・・・

「冗談でしょ・・・何よこれ」

「おいおい洒落にならんでこれは」

「・・・・・・？」

優しい主君の下にいる者たちは混乱の色を見せる

その手紙の内容は全て同じ、ある軍勢の事が記されていた  
内容は以下の通りである

調査対象の義勇軍「無双軍」について

盟主

弓塚剣馬

軍師

諸葛亮、ホウ統、周瑜、徐庶

武將

呂布、関羽、黄忠、马超、趙雲、張飛、夏侯惇  
典韋、張遼、徐晃、孫策、周泰、孫堅、甘寧

- そして、様々な感情が入り混じる中、舞台は乱世へと進んでいく

盟主とこれから（後書き）

龍真「軍の名前がiiiの思いつかなかった・・・orz」

## 董卓連合・原作との会合

「刹里、次の村までどれぐらいかかるんだ」

「あと2日はかかります・・・ってさっきも言いましたよね」

「情けないぞ剣馬。それでも男か」

「そうは言っても関羽・・・これはきついつて」

義勇軍を結成してから2カ月後・・・

俺達は黄巾党の残党を討伐しつつ、旅を続けていた

そして今、俺達・・・無双軍は荒野を歩き続けている

そういえば俺は無双軍の奴らと呼ぶとき、基本呼び捨てになった  
刹里いわく、盟主なのに武将にさん付けはおかしいだろう。という  
ことだ

無論、諸葛亮たちもこれに同意して今では呼び捨てで呼んでいる  
そんなこんなでしばらく歩いていると孫策が前方にあるものを発見  
した

「おい、前にどっかの軍が陣を敷いてるみたいだぜ」

そう言われて前を見つめると遙か前方に軍らしきものが見えた

「装備もちゃんとしていますし、賊ではないようですが・・・」

「ふむ、これは近づいて事情を探るか？」

「それなら正面から堂々と向かうべきでしょう」

「変な疑いかけられても困るしねえ」

軍師勢はあの軍に対してどう行動すべきかを相談し、武将勢は・・・

「よし、張飛。どっちが早くつくか競争しねえか？」

「甘寧、わりいが俺は負けねえぜ」

張飛と甘寧が走り出そうとするのを趙雲と周泰が止めていた競争なんかして走っていったら変な誤解を生むだろうに・・・他の奴らも競争はしないがさっさと向かおうといった感じだ

そして、俺達はその軍勢に向かって近づいていった・・・

「止まれ！！何者だ」

「自分達は義勇軍なんですけど・・・この軍は何故ここに？」

「義勇軍なのに知らないのか？」

「ここは董卓を討つために集まった反董卓連合の本拠地だ」

兵士が董卓といった瞬間に後ろからなにやら殺気を感じた

・・・たぶん呂布だな。あいつ董卓嫌いだし  
などと考えていると後ろからの殺気が無くなった  
おそらく刹里にでも抑えられたんだろう

様々な猛将が揃う無双軍だが、実は全員が刹里に頭が上がらない  
その理由は刹里がこの軍勢の紅一点であり、食事は全て刹里が担当  
していることにある

それ故、武将や軍師の皆は刹里を娘のように可愛がっているのだ

「それにしても・・・どうする？連合に参加するか？」

「参加するか否かと言われれば参加ですね

私達は義勇軍ですし、集まった軍勢から各地の情報収集も行え  
ます」

俺は後ろを振り返りながら聞くが、どうやら全員参加するつもり  
ようだ

仕方ない・・・とため息を吐くと俺は目の前の兵士に連合への参加  
を申し出た

そして、兵士が袁招に確認を取りに天幕へ向かう・・・時に気が付  
いたのだが

「あれ？・・・俺らって名前一緒の奴に会ったらずくね？」

その事実俺が気づいたときにはもう遅かった・・・

「袁招様、お知らせしたい事がございます」

「何ですか？今は軍議中でしてよ」

「いえ、それが・・・連合に参加したいと言つ義勇軍がおりまして」

「義勇軍？いったいどの田舎者ですか？」

「ハッ、その義勇軍は無双軍と名乗っております」

その兵士からでた言葉に天幕の中の空気が変わる

「無双軍・・・？」

だが、袁招は無双軍という言葉に首を傾げていた

「知らないんですか姫？めっちゃ噂になっている義勇軍ですよ」

「何でも色々な諸侯の武将の名を勝手に名乗っているって・・・」

それを聞いた顔良と文醜が説明をつけたす

「面白いじゃない・・・麗羽、その軍の代表者をここに呼びなさいな」

「なっ！？華淋さん、何故貴方が仕切っていますのー!!」

「他の軍なら別に呼ぶ必要も無いんだけどね

あの不愉快極まりない義勇軍には話をつけないといけないもの」

そう言いながら曹操は額に青筋を浮かべる

曹操のその迫力に袁招は押し黙ってしまった

「なあ・・・桂花。華淋そうとう怒ってるよな」

「私に話しかけないでよ全身精液男

まあ、当然でしょ。その理由が春蘭てことは悔しいけど・・・」

「春蘭とか無双軍の誰かが来た瞬間に切りかかるんじゃないか？」

「大丈夫よ。それを抑えるために秋蘭も連れてきたんだし」

曹操の後ろで戦闘態勢に入っている夏侯惇を見ながら、話す北郷たちだが、北郷はここである事に気が付いた

「なあ、秋蘭・・・無双軍がここに来て春蘭がいきなり斬りかかったらどうする」

「何を言うのだ北郷・・・」

そんなの姉者の名を語る愚か者を一緒に殺すに決まっているだろっ」

「だ、そうですが・・・桂花さん？」

「話しかけないで・・・頭痛くなってきた」

曹操軍は殺気を隠そうともせず、完全に戦闘態勢だ

その他の軍も無双軍に同じ名前が記されている者たちは殺気立っていた  
そんな中、天幕の扉が開かれこの場にいる全員の視線がそこにいる者たちに集中する

# I 連合軍SIDE OUT

俺達は兵士に案内され、軍議をしている天幕の前まで来た  
今ここにいるのは俺、それにホウ統以外の軍師メンバーあと護衛の馬超と夏侯惇、趙雲だ  
刹里以外、同じ名前の奴が天幕の中にいる気がするが・・・とりあえず中に入るか

「突然の来訪、申し訳ありません  
私は無双軍の盟主である弓塚剣馬と申します」

俺は天幕に入ると、刹里に言われたとおり自分の名を名乗り周りを見回す  
やべえ・・・マジで恋姫だ。一刀はつと、曹操の後ろつてことは・・・  
魏ルートだな  
それにしても殺気が痛いです。どうやら相当嫌われてるなウチの軍これ、俺と刹里以外が自己紹介したら戦闘になるんじゃないやマジで  
でも自己紹介しないわけにはいかないしな・・・

「私は無双軍軍師、徐庶と申します」

続けて刹里が自己紹介する。恋姫の諸葛亮がなんか驚いてるが・・・

あ、そういえば徐庶って諸葛亮と同じ水鏡塾の出身だったのか？  
最も問題はここからなのだが・・・

「同じく無双軍軍師、諸葛亮」

「はわっ!？」

「同じく、周瑜」

「・・・・・・ッ!！」

ぬうおおおお、殺気があああ!!

劉備と諸葛亮は驚いてるんだけど孫策と周瑜からの殺気が痛い！  
！ものすごく痛い!!

「えっと・・・それで後ろにいるのが・・・」

うわぁ・・・紹介したくねえ。ていうか一刀君も大分驚いてるよ。  
当然だけど

「無双軍武將、趙雲と申します」

「同じく、馬超」

「同じく・・・夏侯惇だ」

そして全員の名乗りが終わった・・・のだが  
名乗り終わった瞬間、もう殺気が飛び交っています  
周りにいる武將の皆様に至っては武器を持ち出す始末だし・・・

ああ、ウチの軍はここから生きて帰れるのだろうか？本当に心配に

な  
っ  
て  
き  
た

## 無双軍と軍議と武將の邂逅

成り行き上、反董卓連合に参加した俺達

そして俺達は現在集まった諸侯から殺気のこもった視線を受け続けていた

「覚悟はしてたけど・・・この状態で軍議するのか俺達は」

「しょうがないです。我慢してください・・・」

隣に座っている刹里に耳打ちをするが一蹴された

諸葛亮たちは殺気に気づいているようだが、あえて無視を決め込んでいるようだ

俺は諸侯を見渡すが目があつた瞬間、ものすごい睨まれた

「では、無双軍の方々に言っておく事があります

この私が反董卓連合の総大将・・・袁本初ですわ!!」

ため息を吐いていると袁招が立ち上がって言った

どうやら総大将の決定は俺達が来る前に終了していたらしい

「そうですか、では袁招殿

これから先の予定ですが・・・いったいどのようにお考えで?」

諸葛亮がこれからの予定を袁招に質問する

これは軍師としては当然の質問なのだが・・・

恋姫を知っている俺としてはこの質問は意味がないと感じた

「決まっています。雄雄しく、勇ましく、華麗に進軍ですわ」

「は？」

おおぅ……。俺以外の無双軍メンバーが呆気に取られてるよ  
 やっぱりな。薄々そんな事を言う気がしてたんだが

他の諸侯も頭を抱えている。俺達がくるまで苦労したんだな．．．

「少し待ってください。袁招殿

進軍の経路や各諸侯の軍勢の把握、それに兵糧などの確認は」

「そんなもの各自の軍でやればいいでしょう」

袁招の言葉に無双軍メンバーの時間が止まる

いくら俺でもここまで馬鹿とは思わなかったぞ……

「何を考えているのだ！！連合において各諸侯との協力は必須！！それを集まった軍の情報すら確認せず、戦をしようなど馬鹿にも程がある！！」

「周喻殿！！気持ちわかります！！」

痛いほどわかりますがここは落ち着いて・・・」

「放すのだ趙雲！！あそこまで軍略を馬鹿にされて軍師が黙つてられるか！！！！」

周瑜が袁招の言葉に激昂し、それを趙雲が諫める  
このままでは袁招に斬りかかりそうな勢いだ。しょうがない、止めるか・・・

「刹里・・・GO」

「・・・また私ですか」

そして刹里も止めに入った事で何とか周瑜は止まったが・・・  
袁招は馬鹿にされた事で怒っているし、面倒な事にならなければいいんだが

「何なんですの貴方のところの軍師は！

少しは礼儀というものを勉強したらどうなのですか！！」

「ふざけるな！！きsmツ！？」

「趙雲さん達！！周瑜さん連れて脱出！！」

「・・・心得た！！！！！！」

袁招の言葉に再び反論しようとする周瑜だが  
刹里に止められたあげく、武将勢により天幕の外へと連行された

「騒々しい軍勢ね・・・」

曹操がこちらを見ながら呟く  
そして刹里が席にもどり、軍議が再開された  
・・・まあ、その間も殺気がひどかったけどさ

！  
約30分後・・・

ようやく軍議も終わり、俺達は自分の軍勢にあてがわれた場所へと向かっていた

軍勢とはいってもウチの軍に兵士は1人もいない

これには軍を作ってもいざ元の世界に帰る時に困るからという理由によるものだ

そして俺達が戻ると、無双軍のメンバーが不機嫌そうな顔をしていた理由を聞くとどうやら周喻たちから袁招のことを聞いたらしい  
とりあえず俺は軍議で決定した事を皆に話し、これからの予定を立てることにした

「とりあえず軍議で決定した事なんだけど

泗水関の先鋒は劉備と孫策の軍で・・・俺らは各諸侯の援護になった」

「各諸侯の援護とは・・・？」

「何でも兵がいらないなら遊撃部隊でもやれ・・・ということらしい」

関羽の質問に呆れながら答える

いやね。それでもどこの軍を応援するかぐらい決めようよ

こっちとしても予定が立てにくいじゃん。各諸侯との連携もあるわけだし

そんな中、俺達の軍に向かって凜とした声が響いた

「無双軍はここか！！話がある！！」

声のした方を向くと曹操たち・・・後ろには劉備と孫策の軍勢＋馬超と趙雲がいた

・・・あれ？もしかして殴りこみ？

## Ⅰ SIDE 一刀

軍議が終わり、現在俺は華淋達と一緒に無双軍の元へと向かっていた  
何でも軍議の場で春蘭の名前を名乗った男に文句を言いに行くらしい  
もちろん希衣や流々も一緒だ。典葦って名前も無双軍の中にあつた  
しな

それで無双軍の元へと向かっていたのだが・・・  
途中で他の軍の人とも合流した。どうやら皆、目的は同じらしい

「無双軍はここか！！話がある！！」

華淋がそう叫ぶと、腹ぐらいまで髭を伸ばした大男がこちらに近づいてきた

「確かに我が軍は無双軍だが・・・いったい何の用だ」

「貴様は・・・？」

「人に名を尋ねる時は自らが先に名乗るのではないか？」

「貴様・・・華淋様に向かって・・・」

「下がちなさい春蘭」

私は曹操。この連合に参加している者よ」

華淋が名乗ると無双軍の人たちが驚いていた  
特に目の前に立っている大男は完全に動きが停止している

「私は名乗ったわよ。次は貴方が名乗りなさい」

「・・・ハッ！！すまない少々驚いた

拙者は関羽、字は雲長と申す。先程の非礼申し訳ない」

「ふざけるなあ！！！！」

大男が名乗ると後ろの方から叫び声が聞こえる  
慌ててそちらを向くと黒髪の女の子が武器を構えて激昂していた

「貴様が・・・私の名前を語る輩は・・・」

つてことは、この子が関羽か・・・

正直俺としては目の前の大男の方が本物って感じがする。髭もあるし

「何を馬鹿な事を。関羽は間違いなく拙者の名だ

第一、お主の名を拙者が語ったところで何の徳がある」

「貴様・・・ッ」

まさに一触即発とはこのことだろう

互いに武器を構えだしたところで思わぬ仲裁が入った

「関羽・・・抑えろ・・・」

「・・・周泰か」

関羽さんがその人の名を呼ぶと、今度は孫策さん達の殺気が膨れ上がる

これもしかして無限ループになるような気がするのは気のせいだと思いたい

ふと、関羽さんたちの後ろを見ると剣馬と呼ばれていた人と視線が会った

その人との出会いで俺の運命は大きく変わる事となるのだが今の俺にはそんなこと知る由も無かった

## 御使いと無双軍と

現在、俺の目の前ではウチの関羽と恋姫の関羽が互いに武器を構えている

一応周泰が止めに入ったのだが、今度は孫策のここからの殺気がひどい

これからどうするかと考えていると北郷一刀と目があつた

「だから関羽は拙者の名前だといっておろう!!」

「ふざけるな!!私が関羽だ!!!!!!」

向こうではまだ、言い争いをしているし・・・

よし、この機会に一刀君と関係を作っておこう。後々役立つかもしれないし

そう決めた俺は腰を上げ、北郷一刀の元へと歩を進めた

「よ、君が天の御使いって言われてる北郷一刀か？」

「あ・・・ああ、一応そうだけど・・・」

「俺は無双軍盟主、弓塚剣馬だ。剣馬と呼んでくれ」

「じゃあ、俺のことも一刀でいいよ」

俺と一刀は互いに自己紹介をして握手を交わす

「実はな・・・俺も日本人なんだ」

「ええっ!？」

俺が小さくそう言つと一刀は驚いて、目を見開きながら叫ぶ

「本当なのか!？お前もこの世界に・・・」

そこまで喋つたところで一刀の口を塞ぐ

魏だけならともかく蜀とか呉の奴らに知られちゃまずいし

「静かに・・・あまり他の人に知られたくない

自分の部屋にいたはずが目覚めたらいきなり荒野でな

まあ、刹里・・・徐庶以外の無双軍と一緒にだったけど・・・」

「俺もだよ。いきなり荒野に・・・つて

無双軍の人たちも一緒に飛ばされてきた人たちなのか？」

「ああ、んでもってあいつらは俺達の世界の三国志の武将な。本物の」

ところどころ嘘を織り交ぜて一刀に説明する

まあ最後のところで完全にフリーズしてるみたいだが

しょうがないので無双軍の方に視線を移すと・・・

「一騎打ちだ!!貴様の化けの皮・・・この私が剥がしてくれる  
!?!」

「面白い・・・いざ尋常に勝負といこうではないか!!」

あつるえゝ、何故か一騎打ちに発展してるんだけど  
関羽、お前は少し自重しろ!何が尋常に勝負だ!!

「というか周泰たちは何やってんだ！？関羽を押さえるよ！！」

周泰は呉のメンバーに睨まれまくって動きが止まっている  
他の無双軍のメンバーを見てみると全員が視線を逸らしていた  
しょうがない、ここは・・・

「刹里・・・GO！！！！」

「だが断ります」

「即答ッ！？」

「いつも私に任せてないで少しは自分も動いてくださいね？」

頼みの綱の刹里には拒絶され、何故かその後には黒いオーラが・・・  
あ、やっべ。これは久々に本気で怒ってるな

ちなみにこの状態の刹里に逆らうと、他の無双軍のメンバーから袋  
叩きにあつた拳句

怒りが収まるまでの食事が全て貧相になるという地獄が待っている

「しょうがない・・・曹操殿、並びに他の陣営の皆様

遅くなりましたが一体どういった用件でいらっしゃったのです  
か？

戦の前だというのにわざわざ争いに来たわけではないでしょう」

俺が関羽の前に立ってそう言うと言った曹操の口元が吊り上る

言葉遣いは大丈夫だろうか？刹里や諸葛亮に叩き込まれた通りに言  
っているが

「用件はもう理解しているでしょう？」

あなたが私の大切な部下の名を勝手に名乗った事についてよ」

「他の陣営の方々についても同じ用件でしょうか？」

曹操軍以外のメンバーが俺の言葉に頷く

「ではこちらからも弁明を・・・」

私達はあなた方の名を語った事など一度もありません」

「ふざけるな！！つい先程も目の前で名乗ったではないか！！！」

俺の言葉に向こうの関羽が激昂する

こっちとしてはなるべく穏便に済ませたいんだが・・・

「先程名乗った名は真正正銘、こちらの武将の名です

偶然にもそちらと名前が一緒なようです。あまり気にしないでください」

「貴様・・・ッ」

「じゃあ何？貴方達の名前は偶然、私達の名前と一緒にただか  
ら気にするなと？」

「そうです」

淡々と述べる俺に対して向こうの軍勢の殺気はどんどんと膨れ上が  
っていく

「ちよっと待ってくれ。剣馬」

再び一触即発の空気になったが、一刀が声を発した事で殺気が霧散する

「どうしたんだ？一刀」

「明日から戦が始まるのにこのままじゃ堂々巡りだ  
これだと明日の戦に支障がでる。これは全ての陣営にも言える  
ことだ」

「そうだな。・・・で、どうする？」

「いや、それは・・・」

殺気を霧散させてくれたことには礼を言うが・・・  
その後の言葉を考えてなかったのか黙る一刀に少し呆れてしまった

「そうですね。そこの方の言うとおりです  
このままでは明日の戦に支障が出ますし、この話はまた後日に  
するというのは？」

刹里が一刀を援護し、とりあえずこの場を収めようとする  
いや、それ自体はありがたい事なのだが・・・

「なんで一刀の援護はして俺のはしてくれないんだよ」

「剣馬はもう少し私の苦勞をわかってください」

いや、それはわかってるんだけどさ・・・  
俺がため息をついていると一刀がゆっくりと刹里に近づいていきそ

して・・・

「助かったよ・・・俺だけだと上手く説明できなくてさ。ほんとにありがとう」

「ッ！？／／／／／」

そう言つて一刀は刹里の頭を撫でる

おお・・・これが噂に聞く種馬スマイルか

ところで一刀、曹操たちのこと忘れてるだろ。もの凄く殺気立ちますよ

具体的には曹操とか夏侯兄弟とか関羽とか・・・ん？何故に関羽から殺気が？

よく見ると無双軍全員から殺気がにじみ出てそのまま武器を・・・つてマズイ！！

「一刀！！後ろに飛べえええええつ！！！！！」

「は？何を・・・どわあっ！？」

俺の言葉に一刀はそのまま後ろに下がる

するとその瞬間に今まで一刀がいた場所に無双軍全員の武器が投合された

「ちょ・・・まっ、何だよこれ！？」

そのまま後ろに倒れこんだ一刀は絶賛混乱中だ  
自分に向かっていきなり武器が飛んできたら無理もないが・・・

「貴様……今刹里に触れたな……？」

「おい、策。縄もってこい」

「この馬鹿を縛り首にしてやる」

「わかつたぜ親父」

「消えろこの虫けらが……」

「……殺す」

おおお、無双軍の皆が殺気立っている

・ ・ ・ ちなみに上から張遼、孫堅、孫策、呂布、周泰だ

ウチの軍は刹里に近づく男には容赦ないからな

娘の事を思う父親は強いねえ……いかにいかに、現実を見ねば

「曹操殿……しばしそちらの軍の者に制裁を加えますがよろしいですか？」

「殺さない程度になら許可するわ。思う存分やりなさい」

「華淋さんんんんん！？待つて俺を見捨てないでえええええ！」

!

趙雲の質問に淒くいい笑顔で答える曹操

曹操にも見捨てられたか……哀れだな一刀

俺は心の中で一刀に黙禱を捧げる。すると刹里が俺の方に近づいてきた

「あ、あのね剣馬、今は違うの！！今は・・・」

刹里は顔を赤くし、手をブンブンと振り回しながら必死に何かを言おうとしている

それを他の陣営の人たちは暖かい目で見守ってるし・・・そうか、これは！！

「刹里・・・」

「け、剣馬？」

「心配するなって・・・お前の気持ちはわかってるからさ」

「え・・・？」

俺の言葉に刹里は驚いて動きが止まる

一刀なら気づかないんだろうが・・・俺は違う

しばらく続く沈黙。他の軍勢や無双軍の奴らが息を呑む中、俺はゆっくりと口を開く

ちなみに一刀は無双軍の奴らにボコられて現在気絶中だ

「今の態度を見れば誰でも気づくよ。刹里・・・お前・・・」

「う、うん・・・私・・・剣馬のことg」一刀に惚れたんだな！！  
「・・・は？」

俺がそう言った瞬間、刹里の動きが完璧に停止した

やっぱり図星か・・・一刀よ、またフラグを乱立させやがって・・・  
少しはそのフラグ建築技術を俺にも恵んでください。いやマジで

「・・・ち、違うの剣馬！！私は・・・」

「いって。今は一刀が気絶してるんだし大丈夫だ

ライバルが多いと思うが頑張れよ！！俺は絶賛応援するＺＥ」

俺はサムズアップしそうな笑顔で刹里に言う

だが、それを言った瞬間、周りからの視線がきつくなった様な気がした

それに刹里は下を俯いてフルフルと震えている

視線は何故かわからんが・・・刹里はおそらく照れてるんだろう

「そんなに恥ずかしがるなって

せつかく好きな人ができたんだから頑張れよ」

「剣馬の・・・」

「ん？」

「剣馬のバカアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

「うぼろおっ！？」

そして何故かいきなり殴られた。しかもグーで

刹里はそのまま後ろを向いて俺達用の天幕の中へと走りこんでしまった

「やっぱり皆の前で言うのはまずかったか？・・・ってヒィッ！？」

『剣馬・・・』

あれ！？何で皆キレてんの！？

そして各陣営の皆さん何故そんな呆れた顔で帰ろうとしてるんですか！！

一刀は・・・気絶したまま曹操に引きずられてる・・・助けが誰もいねええええ！！

「ちょ、皆おちて・・・」

『天誅ううううう！！！！！！！！！！』

「ぎゃあああああああああああああああ」

そして俺の意識はそこで途切れた

これは後日談だが、刹里がその後しばらく口を聞いてくれず飯も作ってくれなかった

・・・俺がいつたいなにをしたというんだろうか

## シ水関と無双軍・戦の始まり

一刀と俺が無双軍メンバーにボコられてから数日・・・俺たち反董卓連合軍はシ水関の前へと軍を進めていた

今回の先鋒は劉備軍だ。劉備軍は人数が少ない事もあり、俺達無双軍も何人かは一緒にいる

現在ここにいるのは俺＋無双軍の蜀メンバー＋呂布だ  
行軍の際にまた関羽同士の一騎打ちが勃発しそうだった。それは何とか止めたのだが・・・

「なあ・・・刹里、いいかげん機嫌直してくれないか」

「・・・・・・・・」

「はぁ・・・」

俺は刹里に話しかけるが返事は返ってこない  
完全に怒ってるな・・・刹里の奴  
理由はわからないが、こないだの事件から俺は刹里に完全に無視されているのだ

ちなみに理由を無双軍の皆に聞いても全く教えてくれない  
それどころか強制的に鍛錬に参加させられ、何度か死ぬ思いをした

「諸葛亮・・・これからどうするんだ？」

「そうですね、正直言って劉備殿の軍勢は兵の数が少ない・・・  
まともに勝負しても勝てそうに無いですし

最終的にはどこかの軍勢も巻き込みでの乱戦になると思いますよ」

おお・・・恋姫における劉備軍の策を完全に言い切ったよこの人やっぱ同じ諸葛亮だとも思考も似てくるのかな？

「剣馬、シ水関が見えたぞ」

前を歩いていた黄忠の言葉に俺はようやくかと安堵の息を吐く正直、ここまでの徒歩で俺の体はもう限界なのだ

馬に乗ればいいとは思うのだが生憎と無双軍に馬はいない全員が馬に乗らなくても強いし、いざとなったら相手の馬を奪って乗っている

というか馬を全員分などと、そもそもウチの軍にそんな金銭面での余裕は無いのだ

義勇軍でまわるのは賊に襲われている、もしくは襲われた村などであり

村人の金銭面での余裕は無い。そんな人々から報酬をもらうわけにはいかないからだ

よって無双軍は基本的に野宿、食事は狩りをしながら暮らしている他にも商人の護衛で得た金は全て刹里が保管・管理し、刹里や軍師勢の判断で使っている

さらに刹里が厳しいおかげで自由に使える金など全くといっていい程に無い

俺達のため・・・というのはわかるのだがもう少し融通が利いてもいいと思う

本当に刹里は頑固者で意地っ張りで・・・」

「口にでていますよ？剣馬」

ふとした声に後ろを振り向くと青筋を浮かべながら微笑んでいる刹里がいた

どうやら途中から声に出ていたようだ・・・反省しよう

「ところで刹里、俺達はどうするんだ？

諸葛亮が言うには乱戦になるらしいから俺達が前線にいたら危ないだろ」

「そのまま前線に出ていて斬られればいいんじゃないですか？」

「ひどっ！？・・・ていうか刹里まだ怒ってんの？」

「怒ってないですよ？どこぞの馬鹿な人の朴念仁ぶりに嫌気がさしているだけです」

朴念仁・・・一刀か。それで何でこちらに被害がくるのかは疑問だがとにかく刹里が怒っているのは一刀のせいなんだな。あの種馬め

「さて・・・夫婦漫才はさておき、これからの予定ですが」

「私らは劉備軍の本体で待機、武将の皆には前線に出て戦力の維持かねえ」

諸葛亮とホウ統がいきなり真面目な顔をして話し出す

何故か刹里が顔を赤らめていたが・・・あまり気にしないでおう

前線に出てる奴ら・・・大丈夫かなあ問題を起こしてなければいいけど

― 劉備軍陣営・前線

「おーい！！おじさんたちっ！！！！」

「む・・・何事かな張飛殿」

「これからシ水関を攻めるんだけど、しばらくしたら銅鑼がなってその合図で鈴々たちと一緒に無双軍のおじさん達も後退してつて朱里が言ってたのだ」

「そうか、だが我らは軍師殿から戦力の維持と言われておるのだが・・・」

「そうなのか？」

「我らは我らで動く故、心配はいらぬ  
そちらの軍師殿にそう伝えてはくれぬか張飛殿」

張飛からの提案を関羽はそれとなく断る  
断った事に張飛は少し不満げな表情をしたが報告のためこの場を去った

それと同時に無双軍の面々が無双軍の方の張飛を見ながらいつせいに笑いだした

「な、何笑ってやがるんだテメエら！！！！」

無論、笑われている張飛は完全に不機嫌である

「いや、だって・・・張飛殿があんな小さい娘子とは・・・」

「こちらの張飛を見ても全く繋がりが見当たらん、くくっ」

「テメエらあゝ」

趙雲と黄忠がそう答えるが二人とも笑いを堪えられていない  
それに張飛は激昂し、丈八蛇棒を振り回そうとするがそれを関羽が  
後ろから押さえつける

「ひょっとすると、これから討伐する董卓も女だったりしてな」

冗談交じりに馬超が言ったその言葉に全員の動きが停止した

「貴様ああああああ！！！！何て事を言い放つ！！想像した  
だろうが！！！！」

「馬超殿！！いくらなんでもそれは無い！！アレが女子になるわけがない！！」

「そうだ馬超！！心を強く持て！！！！そんな事があるわけ無い  
だろう！！！！」

呂布、趙雲、関羽がいつせいに馬超に向かって叫ぶ  
ちなみに残りの二人も想像してしまったのか、青い顔をしながら口

を押さえている

そうこうしていると前方に向かって関羽と孫策が出て行くのが見えた  
どうやら敵将を挑発しているらしく、しばらくするとシ水関の門が  
開き軍勢が出てきた

それを見て武器を構えなおす。どうやら戦が始まるようだ  
武器を構えなおした無双軍の将たちは我先にと敵に突撃していく

シ水関での戦の始まり・・・それと同時に6匹の虎が戦場へと放た  
れた

## 激闘・シ水関 無双軍の力

董卓軍が突撃してくるのを見た無双軍は各々の武器を構え、董卓軍の前に立ちはだかった

「くつくくつ、血が騒ぐのお・・・」

やはり戦というのはこうでなくてはいかん」

「ご老体、無理は禁物ですよ

御身に何かあつてからでは手遅れなのですから」

その軍勢を見て笑っている黄忠を趙雲が諫める

黄忠は趙雲に「わかつてるわい」と呟くと弓に矢を番えて先頭にいる兵を射抜いた

それに呼応するように左翼に関羽と馬超、右翼に呂布と張飛が突出する

一騎当千の将たちが戦っているそのころ、

華雄をおびき出す事に成功した劉備軍は既に後退を始めていた

## I SIDE 剣馬

「どうやら始まったみたいだな。ところで刹里・・・前線どれくらい持つと思う?」

「普通なら持たないんですが・・・あの人たちなら普通に維持し

続けそうで怖いです」

俺が前線の方を見つめて呟くと、隣にいる刹里もため息を吐きながら呟いた

今回、無双軍の前線メンバーに出された命令は唯一つ、「戦線を維持せよ」これだけだ

何故この作戦なのかと言うと、諸葛亮いわく劉備軍の作戦はおそらく「乱戦に持ち込むことで各諸侯の兵に董卓軍の相手をさせ、自らの軍の損害を抑える

・ 華雄を討ち取る事で名を上げ、あわよくば各諸侯の戦力を削る」  
・ ・ ・ということだ

即ち前線を維持し、乱戦に持ち込まなければこの作戦は成立しないそこで俺はこの作戦を成功させないため、無双軍に前線の維持と華雄の捕獲を命じた

華雄の捕獲は董卓について無双軍メンバーに説明をしてもらうためだけにこのままいけば劉備が助けるのだろうか

・ 俺達というイレギュラーがいる以上、万が一と言う事もあるしな・ ・

そんな事を考えていると前の軍勢が後退してくるのが確認できた前線にいるあいつらが暴れすぎなければいいのだが・ ・ ・

I SIDE 董卓軍

・・・なんだ、あれは  
目の前にいた劉備軍が後退し、自分達の前に立つのはたった6人の男のみ  
こちらとの人数差は百倍近いにもかかわらず、そこから向こうに兵が進む事ができない

その手に持つ武器が振るわれるごとに人が宙を舞う

中でも呂布様と同じ武器を持つあの太柄の男。あれは危険だ  
あれは人ではない。人の皮をかぶった獣だ。近づけば・・・コロサレル

董卓軍の中の幾人かの手から武器が落ちる音が聞こえる

立ちほだかる無双軍に董卓軍の兵士たちは戦意を失いかけていた

「おい呂布！！てめえ今何人ぐらいだ！！」

戦場に張飛の音が響く

「ざつと200というところか・・・そついう貴様はどうなのだ  
！！」

「俺も同じぐらいだ！！どうだ？ここは酒でも賭けて勝負といかねえか！？」

「ふつ・・・俺に挑んだ事を後悔させてやるわ！！！！」

呂布と張飛は互いに会話しながら董卓軍の兵士を次々となぎ払っていく

そしてその光景を他の諸侯たちは有り得ない物を見るような表情で見ている

当然だろう。無双軍はたった6人で前線を維持しているのだ

これには他の諸侯も驚きを隠せない。その中でも特に焦ったのが劉備軍だ

軍師の2人などは無双軍の武將の強さに青い顔をしながら冷や汗を流している

「そんな・・・ありえない」

諸葛亮（劉備軍）はそう呟き、震えている。どうやら目の前の事実を信じたくないらしい

隣にいるホウ統も「あんな人たち相手に・・・策なんて・・・」と呟いてるし

何故か後ろにいる無双軍の軍師勢もウンウンと頷いてるが、見なかったことにしておこう

十分あいつらが規格外だというのは認めるが

剣馬は無双軍の武將をどうやって防ぐか苦悩しているであろう他の軍勢の軍師に同情した

刻々と戦の終焉は近づき、シ水関の戦いは激しさを増していく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5482r/>

---

恋姫？無双？ 渴っ！！～漢だらけの三国演技～

2011年10月7日20時39分発行